

優れた「農業経営者」は「農村経営者」になる

本誌創刊時に「農業経営者」という書名が良くないと言われた。発言者は農業関係者だったが、それは農業界一般の認識だった。1993年のことだから今から28年前である。「農業経営者とは、他人の都合を考えずに自分だけ良い思いをしようとする農家のことだ」

それが彼の誌名を批判する理由だった。農業とは人々の暮らし方であって事業経営ではないというのが農業にかかわる人々の大方の認識であり、貧しい農民、農家、農村に指導啓蒙するのが農業関係者の責務であり、農業雑誌が果たすべき役割だと人々は思っていたのかもしれない。

江刺の稲

「江刺の稲」とは、用排水路に手刺しされ、そのまま育った稲。まったく管理されていないこの稲が、手をかけて育てた畦の内側の稲より立派な成長を見せている。「江刺の稲」の存在は、我々に何を教えるのか。土と自然の不思議から農業と経営の可能性を考えたい。

93年とは平成5年である。細川護熙内閣によってその年の暮れにウルグアイラウンドの農業合意がなされる年であり、コメ農家の中でも自ら都市の顧客を見つけて通信販売でコメ販売をする人々も少なからずいた。また、大冷害で緊急のタイ米の輸入が行なわれた年で、その年の5月に季刊の形で創刊した本誌はコメ不足が現実化した3号目の10月発売号で一気に読者が増えた。ありがたいことではあつ

たが、そこにはいかにもコメ不足で契約取引しているお客さんに高値で売りつけて儲かるとほくそ笑む農民の本音も見えた。儲けを目指すことは悪いことではないし、農民に限らず不屈きな商売人は何時の世にも尽きることはない。しかし、そんなあざとい商売を考える読者はやがて止めていった。なぜなら本誌はそんな経営者の姿を批判していたからだ。

また、ずっと後のことだが、故・松尾雅彦氏（元・カルビー社長）のスマート・テロワールの会合で「農業経営者とは経営規模の大きな農家のことだろう。この集まりに来ているのは違うんじゃない」と言ったのは農水官僚出身で今、立憲民主党の代議士をしている篠原孝氏だった。

本誌が「農業経営者」と語ってきたのは、時代や社会の変化、あるいは顧客を自覚して自らの経営を作り出す者であり、そのためにいくらかの軋轢があろうともそれを乗り越える人々のことだった。経営にはその人なりの形があり、経営規模の大小など関係ない。

隔世の感とはこのことだろう。その変化の大きな理由は何よりも農村の世代交代なのだ。かつては強い想

いを持って農業に入っていた人々が村からいびり出されるようなことも少なくなかったが、いまでは非農家出身の優れた農業経営者も沢山活躍している。変わらないのは農業界や農村に利権を求める者たちだけである。誤解した企業の農業参入も相変わらず続いている。

やがて「農業経営者」という言葉も社会的認知を得た。そして、農業経営者が周りの都合も考えずに自分だけ儲けようとする者たちのことだと言ひ募る人々も時代に取り残されようとしている。

そもそも、事業規模がどうであれ風土に根差す産業であれば成功を望むなら地域の社会や人々を無視することなどあり得ないのである。しかも、真の発展を望むなら、農業外の取引先との連携に可能性を求める意義を考えざるを得ないのである。

先日、スマート・テロワール協会のセミナーの講師が鹿兒島の俵さかうへの坂上隆氏だった。200haを超える畑作から園芸、畜産といった農業生産部門にとどまらず、農業にかかわる多様なビジネスを展開するようになった彼こそが、今に時代の農業経営者としての一つの見本を示しているようにも思える。一度同社のホームページをご覧いただけたらと思う。